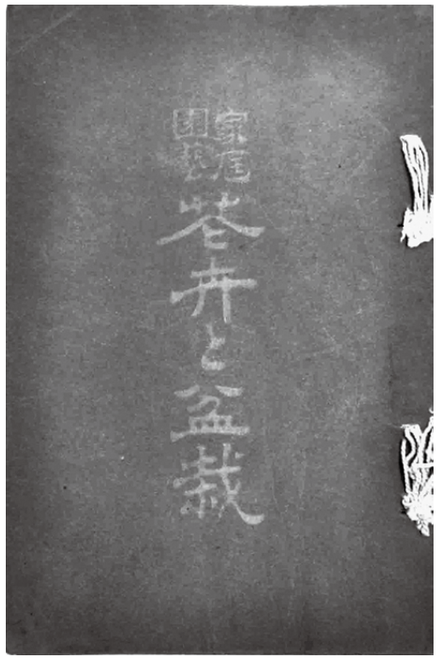
6月

【収蔵品紹介】
作間餘三郎著『家庭園芸　花卉と盆栽』（大倉書店発行　明治38年）

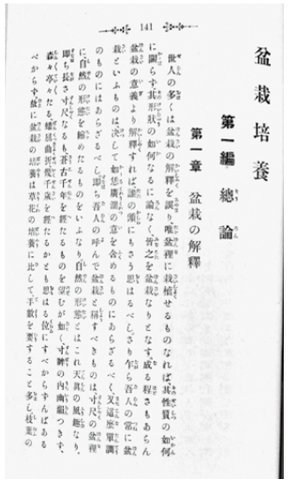
本書は書名のとおり、花卉栽培法と盆栽培養法の2本立てで執筆されたものです。

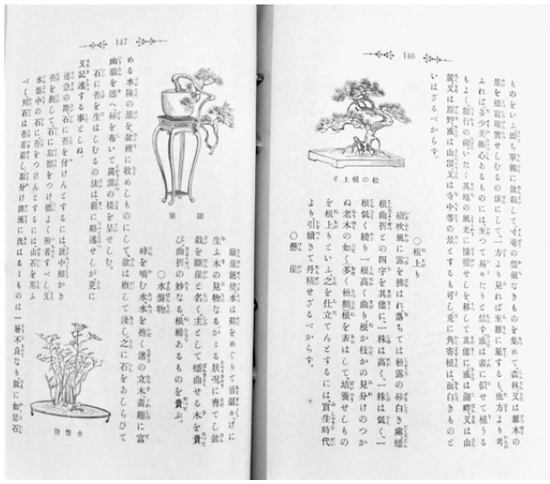
著者は農学士で、明治25年4月から1年間を福島県の農事講師として過ごし、県内各地で行った巡見と講和の記録があります（国立国会図書館デジタルコレクション）。後には東京府の技師に就任し、明治37年7月から明治44年9月まで東京府農事試験場（現在は東京都農林総合研究センターに統合）の長を務めました。農事試験場は農業・畜産・園芸の技術研究などを行う機関であり、著者は公的研究機関に所属する人物です。発行所の大倉書店については、江戸時代から絵草子や錦絵を扱い、明治時代以降は教科書や辞書を扱うようになる書店兼発行所です。つまり、本書は学術的な性格の強い著者と発行所から発行された書籍ということになります。確かに、灌水（水やり）の説明で、空気中の窒素を含む雨水が適していると言及するなど、学術的な記述が散見される点は、本書以前の盆栽関連書籍には見られないものです。一方、用土の説明で、「直接其形状を呼び、其れが通語となりて、盛に用いらる。由つて、学問的の名を附すよりも、旧来に鑑みて、茲にも俗称を用ふる」と述べています。このことから、従来の盆栽関連書籍と同じく、一般向けの普及書であると言えます。



表紙『家庭園芸　花卉と盆栽』

また、著者の経歴から、専門分野は農業を中心とした作物と推測できます。総論で、「就中花卉と盆栽は最も家庭の事業として適良せり。因て本書はかえつて蔬菜果樹の培養法を逸して其両者の栽培法を撰べり。されど家庭の園芸として、果樹と蔬菜の栽培は頗る必要なる、且今後の家庭には、花卉盆栽の培養を行ふとともに、必ず果樹蔬菜の栽植を行はざるべからざるものなる」と述べ、果樹と蔬菜の栽培の必要性を強調していることからも窺えます。農作物が専門であるにもかかわらず、本書で「園芸」の中でも花卉と盆栽を取り上げた理由は、「家庭の娯楽として、家庭の事業として、我が園芸術は最も適良せるものなりと信ず」るためと自序で述べており、背景には、「日本の家庭は、泰西諸国の家庭に比して、一般寂寥の恨あり。其原因は何ぞや、即ち家庭の団欒をとるべき恰好の事業と遊戯とを欠けるを以てなり。」との思いがあったためと思われます。更に、それを発展させ、「吾人は又園芸を目して、一種の美術なりと称すべく、美術中の最も優美高雅、且つ有益なる、尊重すべき、文化の生産物なりと絶叫す」とも述べており、「園芸」は趣味の領域を超え、美術や文化であると著者は主張しています。明治30年代に「家庭」と「園芸」が組み合わされた「家庭園芸」という語が誕生し、団らんを目的として園芸の領域に浸透していったといいます（水島かな江「近代における園芸領域への団らんの浸透」[2008]）。本書もその時流の中にあり、家族団らんのための娯楽としての園芸、殊に花卉と盆栽を普及させようとしたのではないかと考えられます。また、水島氏によると、「和楽団らんの担い手として女性が位置づけられ（中略）その女性の役割として、清潔、装飾を重視する家事が強調され、それらが「家政」項目としてまとめられていく流れの中で、園芸が取り入れられていった」といいます。本書の総論でも、「園芸は（中略）其婦女子に好適せる、以て家庭の娯楽に供し得べく、其清新にして高韻なる、実に家庭の業務として、他に比すべきものなし。」としています。つまり、著者も家庭の娯楽としての園芸の担い手を女性と考えていたのです。盆栽に関していえば、現在は男性の趣味というイメージがありますが、著者は担い手として女性を位置付けている点が興味深いです。


盆栽培養　第一編総論


盆栽樹形

最後に、著者の盆栽観について、盆栽部門の第1編「総論」第1章「盆栽の解釈」から見ていきます。「唯盆裡に栽植せるものなれば、其性質の如何に関らず其形状の如何なるに論なく、皆之を盆栽なりとなす」としていますが、狭義の盆栽については、「広濶の意を含めるもの」ではないといいます。盆栽とは、「寸尺の盆裡に、自然の形態を縮めたるものをいふなり」、「自然の形態とはこれ天真の風趣なり。即ち長さ寸尺なるも、蒼古千年を経たるものを望むがごとく、（中略）幾千歳を経たるかとも思はる位」のものと解釈しています。つまり、鉢植えを含む広義の意味ではなく、現在と同じく、自然の縮景を表現した狭義の意味で、盆栽を定義しています。また、第2章「盆栽の種類」では、「観葉樹木」「観実樹木」「観花樹木」に分類し、その培養形態として直幹や双幹などを挙げています。現在の松柏盆栽、雑木盆栽の中の葉物盆栽と実物盆栽、花物盆栽に相当し、樹形についても現在使用されている用語や形態が見られることから、現在に近い盆栽観であったと考えられます。

本書は、現在に近い盆栽観を有する公的研究機関所属の著者が、明治30年代の「家庭園芸」の潮流に盆栽も含めて記述したものであり、本書刊行以後の盆栽観にどのような影響を与えたのか否かを考える契機を提供してくれる資料と言えます。

（当館主事　立石見雪）